

■ 春の公開講演会

教育におけるスピリチュアリティ

－自我を育てる・自我から離れる－



2007年5月24日(木)

18:30~20:30

南山大学 名古屋キャンパス D棟

西平直氏

(東京大学大学院教育学研究科准教授)

大下大圓氏

(高野山大学スピリチュアルケア学科客員教授・飛騨千光寺住職)

「個性ある生き方と人間性豊かな社会をつくり出すために」は人間関係研究センターのモットーです。「個性」や「人間性」とは本来、パーソナリティやヒューマニティをどう捉えて関わるかという人間関係やかかわりの課題です。

一人一人の生命と健康な生き方に関わる医療現場や、西欧の教育制度を取り入れた日本の大学教育・人間をテーマとする研究現場の課題でもあります。

20世紀半ばに制定された、WHO世界健康機関の「健康の定義」には、病気でないというだけでなく、身体的physical/精神的mental/社会的socialな健康Healthが唱われていますが、これは西欧思想による個人の捉え方や人間観の三側面や病いの観方を基盤にしたものです。そして、WHOでは、21世紀を前に、現代にあった「人の健康の定義」の見直しが討議され、「スピリチュアリティ精神性spirituality」の健康という、もうひとつの人間観の側面が議論されました。そこで、今回、一人一人の身体性/精神性/社会性を尊重しつつ、また、日本語にまだ馴染ませきれていない「スピリチュアリティ」という人間性の側面から、人の課題を実践し、探究している講師による講演会を企画進行しました。

スピリチュアルケアワーカーとして病院医療や看取り(生老病死)の場におられる大下大圓氏(飛騨千光寺住職、高野山大学スピリチュアルケア学科客員教授)とスピリチュアリティの定義やアイデンティティ研究をユニークに展開される西平直氏(東京大学大学院准教授)です。お二人の考え方やジョイント講演による思索のやり取りを聴くことで、西洋、東洋、日本、さらに、それらを包括する個(人)や自我の捉え方をここで考察し、大学教育における人間性やスピリチュアリティの視座の位置づけが見えてくることを期待しています。

【進行(まどかアッセマ)】：お忙しい中をお越しいただいたと思いますが、ゆっ

たりとまた人間関係研究センターの雰囲気味わっていただけたらと思います。

本日はご案内が、新聞や、あるいはセンターの講座などのご案内を通して、いろいろなかたちでいらしてくださっていると思いますが、念のため講師のご紹介をさせていただきます。

本日は西平直（にしひらただし）先生と大下大圓（おおしただいえん）ご住職、お二方をお招きしての、初めてのジョイント公開講演会をさせていただきます。テーマは前にありますが「教育におけるスピリチュアリティー自我を育てる・自我から離れる」というテーマにさせていただきました。

この人間関係研究センターは、本来社会に開かれる大学、もしくは社会、新しい社会、生き生きと個も生きるし全体の組織も生きるという、これからの新しいファシリテーションの在り方なども求めながら、教育の在り方、あるいは社会・宗教・教会、あらゆる会社組織、あらゆる個人の、あるいは家庭の在り方、いろいろな生き方というのを改めて見直しながら、できることならば少しずつ少しずつ変えていく変革者でありたいという、そういうような思いも込めて、講座、または大学教育にあたっているセンター員で構成されております。

そこでこの二方は、現在スピリチュアリティーということのキーパーソンとしていろいろな分野で、西平先生は大学の現場をお持ちですが、同時に哲学的な考察を含め、そして、大下大圓先生は、空海で有名な高野山大学に初めてスピリチュアルケア学科という学科を立ち上げる推進者になられて、同時にスピリチュアルケアワーカーとして、岐阜の病院に、病院にお寺様が行くと必ず言われるのが、「ちょっと、まだ早い」と言われる。

でもそういう葬式仏教を乗り越えて、人が人らしく生きて人らしくこの世を去る、終える、あるいは行って帰る、何かいろいろな人生というものすべてを引き受けるお仕事としてスピリチュアルケアワーカーとしての現場もお持ちでいらっします。

私ども人間関係、お互いに関わり合いながら育ち合っていくというセンターを持っている身としては、お二方のご経験やご視察、それを伺うことによって、また新たなこの地域の力に、あるいは推進力になっていければという思いで、研究の気持ちも含めて、そして南山大学へのこれからのヒントを含めて今日の講演を楽しみにして参りました。

【大下】：みなさん、こんばんは。

ただ今ご紹介いただきました飛騨千光寺の大下大圓といいます。今日は皆さんといっしょにいろいろと学べることを嬉しく思います。どんな方がお見えになっていらっするのか分からない状態で話をするというのは、まな板の鯉みたいで、何かちょっと緊張しています。それぞれがいろんな見解をもっておられるかと思いますが、二人で何とか最後までやっていきたいなと思っています。よろしくお願ひします。

実は私と西平先生と私はずっと前から友達でして、メル友じゃないんですが

(笑)、普段は直(ただし)さんと呼んでおります。すでに二人で2000年に「ボランティアと精神世界」という対談集を、文科省の外郭団体のJYVA(日本青年奉仕協会)というところから出しています。

その頃、ちょうど阪神大震災の1年後でして、震災後に若者が神戸へボランティア活動として出掛けていくまではよかったです、結局、いろいろと疲れて帰って来てしまう。自己実現と張り切っていったのは良かったけど、自分探してもうまくできなくなって帰って来てしまうのです。それはどういう現象なのだろうかと、二人で対論したものが「私と心を考える」というテーマでした。

そんなことがご縁で、公的私的な面で直さんとは行ったり来たり、飛騨のお寺に泊まっていたいただいたこともありますし、そういうご縁があって交流を続けています。実は私がいろいろと教えていただいている先生でもありますので、今日は楽しみにしてきました。

【西平先生】：僕も一言だけ。僕はあまりこういう場に出るのがあまり好きではないんですけども、大圓さんがいつも引っ張り出してくれます。ですから、今日も大圓さんがいっしょだからということでアッセマ先生に騙されて来ました。よろしくお願いします。

【大下】：今日はどういう話し合いになるのか、実はなにも決めてこなかったんです。それでここへ来て先ほど「こんな流れで…」ということで、全体的な枠組みをちょっと話した程度で、出たところ勝負ということで進めていきたいと思います。

ただ今日はスピリチュアリティという中心テーマがあり、この言葉についても、いろんな誤解もあります。すでに深い認識をもっていらっしゃる方もあると思いますので、その辺を、最初に私のほうからお話して、あと直さんのほうに振っていきたいと思っています。

(正面写真をみて)これは私が今行っている高野山大学に行く途中の山から撮ったものなんです、1200年前に弘法大師が「如実知自心(にょじつちじしん)」という言葉を残しています。つまり、これは大日経というお経から取っているのですが「ありのままの、そのままの自分の心を知りなさい」ということなんですね。これは現在、私たちが心を認識していくことにおいては、とても大事な言葉だと思います。よく自己覚知とか、他者理解、いろんな言い方をします。やはり自らの心をどのようにして知っていくのか、今日のテーマであります「自分を知って、またそこから離れていく」その両方の部分ですね。知らなければ、やはり離れられないというようなこともあると思います。

みなさんにはそんな高野山に浸っていただきたいと思いますので写真を紹介します。(画面を指して)これ町石ですね。私は毎週高野山大学へ電車を通うのですが、いつも電車の半分くらいは外国人ですね。世界遺産になったせいでしょうかね。外国の方が実に多くなりました。

次の写真は400年前に、名古屋にも関係あります豊臣秀吉が、母の菩提のた

めに建てた金剛峯寺です。伽藍にはこういう大きな塔もありますね。大塔という、京都とか奈良には三重の塔・五重の塔とありますけれども、高野山は弘法大師がインドの原型をそのまま持ってこようとした。インドにもあるような、建物の真ん中にお椀を伏せたような、こういうパゴダ的な丸い形の塔が密教系には多いのです。

これは御影堂と言いまして、弘法大師のお姿がお祀りされています。

気持ちが冷めてしまうかもしれませんが、次に私の作った図で、日本人のいのち観を宗教的背景から説明してみます。日本人の主な宗教は神道なのか仏教なのかということがよく議論されます。スピリチュアリティの話をする前に日本的な思考について、少しお話をさせていただきます。それを紐解くのに基層文化というものがあります。

その基層文化というのは、縄文とか弥生時代ですね。特に今では例えばアイヌの文化だとか、沖縄の文化だとか、あるいは飛騨にも残っています。うちのお寺は1600年前に両面宿儺（りょうめんすくな）という日本書紀に出てくる人物が開山として信仰されています。1600年前は仏教や神道が確立されるよりも前のことなのです。つまり、そういう基層文化、日本人が持っている原風景みたいなものです。そういったものがあって、そこに宗教的な背景としては神道とか仏教がおきてくる。日本の社会では、いわば1300年間、二つの宗教が仲良く共存してきた社会なんです。ずっと一緒にやってきたというのは特有の文化遺産であり、ある意味では世界に誇ってもいいんじゃないかなと思います。当然そこには中国から入ってきた儒教であるとか道教、こういったものも混濁とした中で、日本は共存してきました。

それから、中世以降になってキリスト教も入ってくる。このキリスト教も受け入れていき、そして近代になって新興宗教も入ってくる。日本というのはこういうのも受け入れる思考を保持しているのです。

それを弘法大師は「曼荼羅」という中で位置付けたわけです。曼荼羅の中にいっぱいいろんなものがあります。この基本的な概念は「対立する思考を敢えて排除しない」ということ、異なる思考を排除しないという根本的な考え方が根底にあるのです。それがベースになって、あの曼荼羅が展開されています。

ですから、C・ユングが、人それぞれが心の中に曼荼羅を持っているという表現をしたのは、やはり、いろんな命の輝きがあるのだろうということだと思います。

そういうことを含めて私たちはこれからの社会で、さまざまな思考を認め合う上で未来型のスピリチュアリティを、築いていく必要があるのではないかと思っています。

このスピリチュアルやスピリチュアリティという言葉は、ご存じのようにWHOが健康の憲章の定義を変えようかということ、1998年の101回目の理事会セッションで話し合われたということがきっかけとなって、世界に駆け巡っ

たといわれています。しかし翌年の総会においては事情があって、上程されていなかったので、定義そのものは変わっていません。ここで議論をきっかけとして、スピリチュアリティとかスピリチュアル・ペイン、スピリチュアルヘルス、あるいは痛み、苦悩、ニードというような側面、いろんな意味でこのスピリチュアリティということが問われるようになったのです。

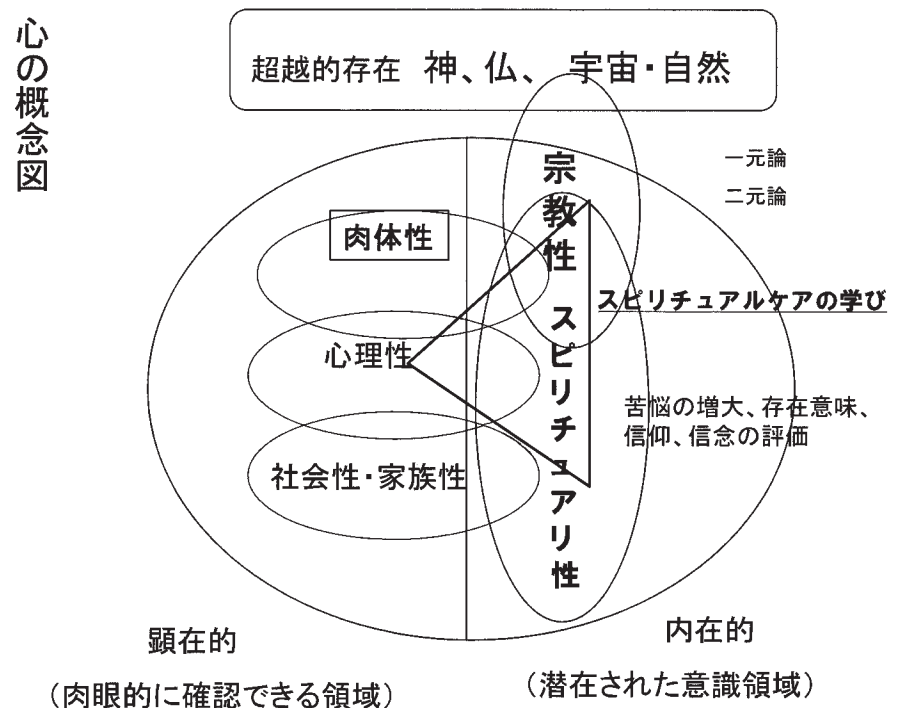
このスピリチュアルということを日本語に訳さなければいけないんじゃないかということになるわけですが、なかなかこれが日本語に訳せないのです。私は学者でございませぬので、この辺は直さんに譲っておきます。

私は、少し時間があったら写真を提示しますがけれども、高山や和歌山医科大学の臨床場面で終末期の患者さんであるとか、あるいは慢性疾患の患者さんと関わっています。そうすると、病気の人の痛み（ペイン）とか苦悩（デストレス）への理解がまず重要になってきます。

体が痛くて、チクチクする痛みというのとまた違って、ドーンとした苦しみ、そういったものは、肉体的な痛みが起ると、それだけではなくて、それに不随して心が不安であるとか、恐怖であるとかという心理的な側面がでてきます。さらには周りや家族がどう思っているのかという社会的な、あるいは家族的な苦悩。そして、それらを包含するかたちで最も深いレベルの問題としてこのスピリチュアルという領域があります。

日本では“いのち”、あるいは“こころ”、あるいは仏教的な心性とか、霊的、魂的、宗教的な視点です。現在TVでは、江原さんの番組が大変有名なんですけれども、江原さんの世界はどちらかというところの魂とか、霊ということをやはり表現しているのではないかと思いますね。スピリチュアルというよりサイキック（心霊的）な傾向が強いですね。

Spiritual care概念図 医学書院 大下大圓 2005



そして「人生の意味」というふうに捉えていくこともスピリチュアリティだろうと思われます。わたしが存在する、ここに実存するという、私が生きている意味を探るとかね。またはその人の持っている信念とか、あるいは信仰という部分もスピリチュアリティです。だから一言でスピリチュアリティといっても、その人によってはどういう意味で、どこを主体としているのかということによって、ずいぶん違ってくるのではないかと思います。

訳語一つ取ってもこうでありますから。その概念であるとか、その世界であるとか、深めるとかというふうになると、ずいぶんと意味合いに差異があるのではないかなと思います。今日は、すべてお話するのはとてもできないと思いますから、二人のコラボレーションの中で何か皆さん方が、「ああスピリチュアリティとはそんなところか」と掴んでいただければいいかなというふうに思っています。

それで、宣伝しますが、このスピリチュアリティへの日本的な理解を深めるために学際的に、今年春に「日本スピリチュアルケア学会」が立ち上がりました。9月15日に正式に学会設立総会をやります。私たちは発起人なんですね。西平直さんも入っていただいています。まどか先生なんかにもお願いしています。いろんな分野＝教育・医療・福祉、あるいは社会・経済、さまざまな領域の人たちが、いろんな視点から、このスピリチュアリティについて検討してみようかというようなことを考えているのです。

ということで、ちょっとひとまず私の話を区切って、西平直さんにバトンタッチします。直さんの視点から、この辺を論理的な視点で考えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

【西平】：ありがとうございました。

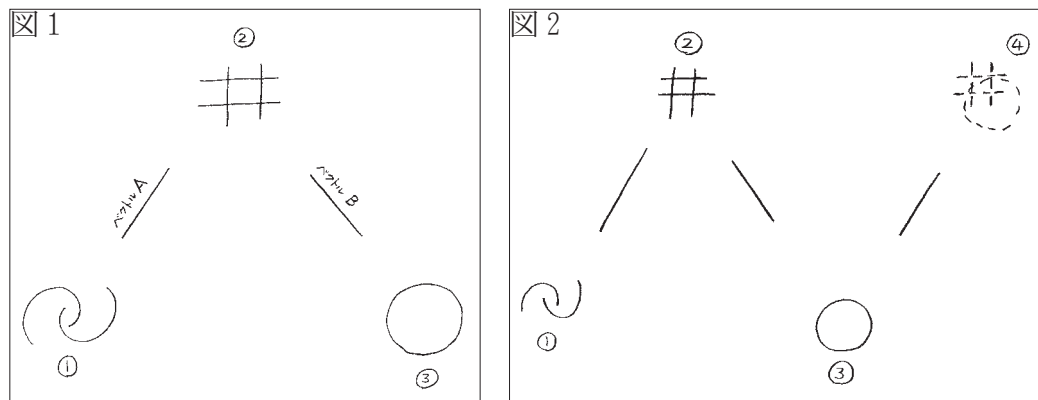
全然接点がなかったら困るなと思っていましたけれども、ありました。曼陀羅の話をしたときに「対立を排除しない」という言葉が出てきましたよね。ある意味で僕は、スピリチュアリティという言葉がすくい取ろうと思っているのはこの点だと思います。対立を排除しないという点。

じゃあ、何でもありかということ、そこが微妙だということです。そこを問題にしたい。それが教育という場面でどういうかたちで表れてくるか。およそ20分ぐらい僕はお話することになると思います。

学生の頃、ずいぶん乱読をしました。いろんな本を読んで自分が何を専攻すればいいのかわからなかったんですね。

そのときに、やはり仏教的な思想、東洋的な思想にずいぶん引かれました。仏教思想を読んでいると、このレジュメにも書きましたけれども、「自分という小さな自分などにこだわるな」、いわば「自我から離れることが大切だ」というのが一番強烈なメッセージとしてくるんです。

例えば我執であるとか、執着であるとか、そういう自分にこだわっているのが一番の問題である。悟りという言葉を使わせていただければ、悟り、見



証体験を一番妨げるのはその自我である、という点が繰り返し僕らに語られるんです。それはそれでよく分かる。

だけど僕はもう一方で精神分析にすごく惹かれていました。精神分析、例えばフロイトが僕らに何を伝えるかという、「自我を鍛えることこそ人間にとって大切だ」というメッセージです。つまり自我が弱い、自我がまだできていないというのは、依存になってしまったり、自分で判断できないことになる。

そうすると、話をうんと簡単にしますけれども、精神分析の思想から、ないしはカウンセリングの思想から僕がメッセージとして受け取るのは、自我こそ大切にすべきである、「自我を鍛え、強くというかしなやかに強くすること」が大切であるという点でした。

しかし、僕の中でこの二つはどうしても相容れないものでした、ぶつかってしまう。一方では自我を大切にしろと言う、一方では自我にこだわるな、自我から離れろと言う。じゃあ、どうするのと。それがずっと課題でした。

ある時期からこれを三段階で考えたらどうかというふうに考えるようになりました。図1の②のところを自我というふうに考えます。自我の確立。そうすると②は、自我を確立することが大切であるというメッセージと、むしろ自我から離れることが大切だというメッセージと、この二つに挟まれたということですね、そうすると、これを三段階で考えるとすれば、図のようになります。

①は自我がまだはっきりしていない、確立できていない。そうすると、このベクトルAは自我を形成していくと言いますか、自我をしっかりと作ることが大切であるという、そういう話であると。それに対して、②から離れろというのは、戻るのではない。二項対立で考えるから苦しくなってしまう。そうではなくて、②から③に向かうベクトルBと考えてみる。

②は分別されている。区別している。つまり自我が確立ということは同時に他者との区別が生じるということである。

この「区切りがある」を仏教の用語ではどうなりますか。やはり差別とか言うんですか。差別が成り立つ世界。そうするとそれ以前は何と呼びますか。ここがポイントなんです。ここを例えば非差別とすれば、差別のある②と差別のない①と③という二つに別れるということですよ。上は区切りがある、下はない。

仏教の思想が僕らにメッセージとして伝えてくれるのは、③に向かえ、①に戻るのではなくて、③へ向かえということではないか、というのがまず僕の中で一段整理してみたことなんです。

そして、実はこの点がトランスパーソナル心理学が僕らに伝えてくれたことでもありました。レジュメにも書きましたけれども、トランスパーソナル心理学ではこの②をパーソナルと呼ぶんですね。何のことはない、僕らの日常意識です。僕ら今パーソナルで聞いています。

それに対して、いわばまだ未熟なと言いますか、それ以前の①を「プレ」、それ以前のパーソナル、まだパーソナルとして成り立っていないと呼んだ。

他方、このパーソナルを超えていく、ベクトルBをいわばトランセンデント、超えるという意味でトランスパーソナルと呼んだということになるわけです。というよりも、僕の理解は、トランスパーソナル心理学の唯一の貢献は、プレとトランスの区別に気を付けろと。ともかくそれを繰り返し繰り返し僕らに伝えてくれていると思います。

じゃあ、区別できるかという単純にはできないです。できないと思う。トランスパーソナル心理学は成功しなかったと思います。でも、本当に貴重なのは、①と②の区別を心掛けろと、それに関しては僕は本当にありがたいと思っています。よく言ってくれたと思います。

でも僕用語では①を未（未自我）、③を無（無自我）とするかたちで、三つの段階で区別しようと思います。

配っていただいたレジュメですと、3番のところになるんですが、突然、世阿弥という言葉が出て来ます。今僕の一番の研究課題は世阿弥の稽古論なんです。ある時間から、本当に面白くなってしまっています。

いろいろ省いてうんと簡単なことを言うと、図2に入ります、前期の世阿弥は①を子どもと考えたわけですね。それで型に入ることが必要だと。だけれど型に入って技ができれば（②）いいかと言うとそうではなくて、いわばそういう技全部なくなった無心の舞い（③）が大切だという言い方をしたわけです。この枠組みに非常に似ているわけです。

ところが、本当に面白いのは後期なんです。後期の世阿弥は実はこの子どもの舞いが理想的な舞いであるということに気づいてしまうわけです。気付くというよりも、それを自分のいわば思想の中ではっきりと語り出してしまおうんですね。

そうすると、困るじゃないですか、すでにもうできあがっているこの無心の舞いと同じことがすでに子どもにできてしまっている。できてしまっているのになぜ稽古が必要かと。むしろ稽古なんかすれば崩れちゃうじゃないかと。何も考えないで無心に舞いをしている子どもにああしろここしろと、それでは逆に流れをととめてしまうではないかと。

世阿弥はその矛盾を引き受けたと思います。だけど世阿弥が僕らに繰り返し

伝えるのは、「真似させてはいけない」ということなんです。この無心の舞いを子どもに真似させてはいけないというのが何度も何度も出てくるんです。何で真似させてはいけないと繰り返すかと言えば真似できちゃうからです。似ているから。そうですよね、この図で見れば、もう一目瞭然。①と③は似ているわけです。だからもうできると思ったらそこで止まってしまうから、決して真似させてはいけない。そうではなくて稽古をしろと。例えば、声のこと、舞い踊りのこと、本当に基礎の基礎、つまり型を繰り返せと言うわけです。

そうすると、ここで僕の問いなんです。じゃあ、すでに理想的である子どもの体、子どもの舞いを潰すのでもなく、そのままにするのでもなく、型に入れていく稽古というのは一体どういうことかという。ある意味でそこが僕が一番知りたいことです。ないしは、結論を先取りすれば、教育におけるスピリチュアリティというのは、この問いを引き受けることだというふうに僕は思っています。

つまり、先ほどの「対立を排除しない」という点です。対立を排除しないというのは、結局矛盾を抱え込むということですよ。教師の側が困るということなんです。そこを何とか粘るといいますか。自分の中で対立を排除しない、異質なものを自分の中で抱え込む。それがスピリチュアリティだというふうに僕は理解しているということです。それが結論になるわけですが、もうちょっとだけこの図を使って先に進みます。

世阿弥は今僕が簡単に話したようなことを伝書というかたちで弟子たちに伝えました。この無心の舞いをどうやったらできるかということ言葉をよって伝えようとする。そうすると、無心で舞っている世阿弥とそれについて書いている世阿弥は違うんじゃないか。

「書いている世阿弥」というのは、②に戻って書くんじゃなくて自分で無心の境地を体得しながら、そこを何とか保ちつつ、でも、④に進んで意識化して文字にしようとする。ここが問題なんです。こんな簡単なことで簡単に済むはずがないと言われれば、もう本当にそうなんです。済むはずがないんですが、枠組みとしては今僕はこう考えているということです。

とすれば、先ほどの対立を排除しないというのは何でもいいということとは違いますよね。むしろ、意識などしない、意識は完全に滅却されている。その境地を保ちつつ同時にそれを言葉にしていくという④の区切りの意識も持ちつつ書いていく。ないしは言い換えれば、もし世阿弥が③の境地に留まったならば文字にして書こうなんて思わないですよ。無理なもの。

だけど無理を承知で、あれだけ、一生懸命書くじゃないですか。あれはやっぱり、この④をギリギリの所で保とうとしたんだというのが僕の理解なんです。

レジュメの下のほうに書きましたけれども、この④を「二重の見」と仮に呼んでおきます。二重に見ることが出来る。そうすると、④は無心の境地と有心の境地を二重に重ねて見ることが出来る境地ということになる。

そうすると、今僕が一番知りたいと思っていることは、④の目を持った、二重の目を持った先生ないしは師匠は、先ほどのベクトルAをどう見ていたのかということなんです。

つまり、型に入ると言われている言葉ですよ。それが、あの二重の目を持った人にはどう見えていたか、どういう工夫をしていたか、その辺りの問題なんです。うまく伝わらなかったらこういうふうに言い換えたらいいかもかもしれません。

②の立場の師匠に稽古をつけてもらうのと、④の目を持った師匠に稽古をつけてもらったのでは違う。じゃあ、何が違うか。たぶん、これは大圓さんが修行をなさったときには、体をもってお感じになったことではないんですか。

【大下】：さすが直さんの世界ですね。とても深いです。分かりましたか、皆さん。この世阿弥の話については、私は別の所で2時間くらい講義を受けたんですけれど、やっぱりすごいですよ。ああ、そうなのか、日本人としてスピリチュアリティを理解するということは、こういうことなのかというふうに感じましたね。

だから、今日のはその触りだけですから、今は何のこっちゃと思っている人もいるんじゃないかと思います。今のこの世阿弥の話というのはすごく面白い、いわゆる日本的にスピリチュアリティを考えられる、さすがはそういうところから引っ張ってきたというか、直さん、すごかったなあと思います。

先ほどの二つという話というのを説明すると、仏教の言葉として出てきたのは二而不二というのがあります。二つにして二つならず、こういう字を書きます。二にして二つならずとか、あるいはこれ反対の場合、生死一如とかという言い方も、別々の概念だけど一つの如しだよ。という一元論的視点です。一つのものとして包摂する思考、二つに考えないっていう、ちょっと表現が違うのかもしれませんが、そんなことを感じました。

それで、今最後に直さんがおっしゃった修行ということですが、私のほうでは仏教の「声明（しょうみょう）」修行というのがあります。世阿弥よりも以前の文化です。中国の5世紀ころに天台智顛というえらい坊さんが、お経にリズムや音曲を付けて唱えられたものが、日本にもたらされました。その声明が最初は奈良にそれから高野山、あるいは比叡山に伝わって行って、それぞれの声明文化、仏教音楽が栄えていきます。それが謡曲だとか能というふうに民間にも発展していったとも言われているんです。

私の高野山の師僧はすでに亡くなりましたけれども、声明で人間国宝に推挙されるぐらいの人だったんです。師僧に声明を習うときは、厳しくて大変でした。唱えるときには全然分からない譜面が目の前にあるんですけど、理論はあとでいいからとにかく声を出しなさいといわれる。

それで師僧と同じ音が出るまで2時間でも正座をしたまま声を出すんですね。それは、理屈とかそういうもの越えて、師僧の唱えるのを全部受け止めよとい

うようなことなのです。こういう伝統的トレーニングを「口伝」といいます。

ちょっとその触りを一つやってみますね。四智梵語と言いまして元タインドの言葉ですね。梵語というインド古代語のサンスクリッド語です。それを中国的にわたって発展するわけですね。(声明の朗唱)

これはほんの1行だけなんですけれども。こういうのがずっと続いていくわけです。また音程も高かったり低いのがあったりというふうにバラエティーです。これを唱えるときなんか先ほどおっしゃった世阿弥のそれと似ています。私は少年から青年期にかけて、これを習得、訓練したわけなんですけれども、真っ白なところへ本物を伝えていく。学ぶ側としては全部それを受け取ろうとする態度。同じ音が出るまで、繰り返し繰り返しやっていくというのは、直さんが先ほどおっしゃったところが通じると思いました。

【西平】：今の話でいけば、これを技と言うんですか、声明の。そうすると、技ができることをもって終着点と見ている師匠②と、この技に囚われたら駄目だということまで見た上で、④の目をもって稽古をつけてくれる師匠とでは違うと。それはたぶん、経験的には共有されると思うんですが、じゃあ、一体何がどう違うのかなんですよ。

それをこれからしばらく時間を掛けて丁寧に見ていきたいと思うんですけれども。例えばですが、言葉だけ言えば、「いずれそこから離れやすいような型の作り方」ってことになりますよね。そこをさっきの自我の話と重ねると、ちょっと強引なんですけど、東洋の人は盛んにここを語ってくれます。

では、④の知恵をもって子どもの頃からどういう自我の育て方をしたらいいのかを教えてほしい。というより、その知恵が隠れているに違いないんです。だけれどなかなか言葉としては語られていないので、そこを探りたいわけです。

言ってみれば、いずれそこから離れやすいような自我形成の在り方ということ。そこまで見通す目を持っている師匠。そうすると、ここからかなり僕の理解になってくるんですが、③がスピリチュアリティではないということになるんです。そうではなくて、言ってみれば④の二重性が、ないしは③から④への動きがスピリチュアリティであって、だから、自分はもうスピリチュアリティを獲得したという言い方は、僕にはとても変に聞こえます。どっかでおかしいと思います。

だから常に日常意識と、そこがまた、だからそこを東洋の人はこういうふうには二而不二と言われるわけですね。ないしは色即是空と言ってしまうわけですよ。色は即空だと、空は即色だと。おそらくその場合、空即是色は③から④へだと思えますけれども。

僕らが日常の意識で見ている、この世界、区切りがある、一つ一つのものが分かれている、人と人は違う。これが実は何もない、空だと、即だってわけですね。だけど単にそれだけじゃなくて、その空は、実は色でもあるんだと、また即とすれば、③がスピリチュアリティではなくて、その即と言いますか、こ

の③から④へのダイナミズムがスピリチュアリティだと。だからややこしいことになると思います。

それで、そういうスピリチュアルな営みが教育の場にぜひ根付いてほしいといますか、工夫されるといいというふうに思っています。その場合に教育のこととして言い換えれば、二重の見を持った先生は、子どもの成長をどう見るか、そこにどういう工夫ができるか。それが、僕が話そうと思ったことです。

【大下】：準備していないところに急に振られてしまいました。まだまだ続くのかなと思って安心していましたのでね。

本当に深い話から急に振られてしまうと難しい部分を私も感じるんですけども。

日本の坊さんでも今は結婚ができます。そして子どももそだてることができます。私も子育ての経験も持っています。そして、子育てをしていく中で、個の自立ということを考えます。この子が一人で立ち上がって、自分の力で世の中に出て行くように親としての願いがあります。そうすると、子どもとの関係性の中で、近寄ったり離れたりを繰り返しながら育てていくわけです。

個人的なことを言いますと、師匠が私たちに伝えてくれていた、その接し方というのは私にとっては子育てに大変役に立っているんです。それで、どういう接し方かということ、明治生まれの師匠でしたから礼儀作法などは特に厳しいですね。さっきの芸じゃないですけども、非常に厳しい。厳しいけれども、心の奥に愛情を持っていた。それは、はじめはやはり型にはめようとしていますね。型にはめるといふか、こういうもんだよということで、その型通りにする。それに、私らは反発します。そんなばかなことがあるかとか、そこから逃げたいところ思っているんですね。

その反発する、それを上手に師匠が付いたり離れたりしていく。その微妙な温度差や距離、間合いのとり方が私にとっては、学びになりました。それは経験から学んだことです。

今日は仏教という視点でお話しをしていますけれども、仏教では一番そのつなぎ役、つまり関係性を表す言葉に「縁」があります。ご縁とか、血縁、地縁、縁という言葉はいっぱいあります。縁側までありますよね。これはアジアで2500年間使われてきた用語です。

縁という言葉は、実は日本的に二つのものを、あるいは複数のものを繋げていく言葉ではなかったかなと思うんですね。それを私は臨床場面の関係性の構築理論に応用しています。

先ほどの4つの肉体的なもの・心理的なもの・社会的なもの・家族的なもの、その4番目にスピリチュアリティがあるというふう理解すると、配列の4番目にスピリチュアリティが来ると考えてしまいがちです。しかし今の直さんのお話を聞いていてもそうですが、私がスピリチュアリティを理解するのは、人が末期になったからとか、あるいは何か困難が出てきたからそのスピリチュアリ

ティが生まれてくるっていうふうに考えるのではなくて、実は元々持っていたものだと思います。スピリチュアリティは生まれたときからあるのだと。それが肉体的なことが、いわゆる自分の病気ってもう治らないという局面に達したとき、あるいはものすごい不安が出てきて、いろんな問題が目の前に山積して、ああどうしようかなって言ったときに、自分の存在の意味を考えてしまう。あるいは、家族が病気になるとか、家族に大きな危機に直面して自分たちがこのまま存続できないんじゃないかというような大きな危機的な状況になったときに、いわゆるこのスピリチュアリティというのがずっと浮上してくると考えるわけです。

つまり、その苦悩が増大していくときにこのスピリチュアリティの痛み＝ペインになる。

だから本来持っていて、生まれたときから実は持っているものであるから、それがいつ出現するかはその人の人生の課題です。

末期だから、スピリチュアルケアが必要なんだというんじゃないんですね。人生のあらゆる場面でそういうスピリチュアリティの意味を考える機会はやってくるものです。ではそのスピリチュアリティをどう教えるかです。先ほどの教育という視点から捉えた時には何か大事なのかと思うところがありました。現在日本の公教育の中で宗教教育はできないという大きな前提がありますから、宗教教育は公然とはできないですね。では何すればいいかという「スピリチュアリティの教育」をすればいいと思います。

同じことをやっても言葉が違っただけで、通用することがあります。一例でおかしい話ですけど、私は時々いろんな病院へ行くでしょ。今は和歌山県立医科大学付属病院へも入っています。県立和歌山医科大学というのは公的な機関なんですけれども、そこへ入るとき、「私は仏教的なケアで来ました」って言ったら入れてもらえないですよ。当たり前なんですけれども。「スピリチュアルケアで来ました」と言ったら、どうぞって入れてもらえます。おかしいでしょ。

言葉が違っただけで役所というのは通るという変な日本社会ですけども。そうすると、そのスピリチュアリティと非常にダブっているのが何かっていうと、ここに宗教とか文化です。

だから日本人は宗教感が不明瞭な国民性があるとか、皆さんはいかがですか？私はこの宗教しか信じていない、ほかのものは一切信じないというようなそういう限定的な宗教観を持っていらっしゃるのでしょうか。

一般にお正月は初詣でお宮さんへ参りに行きますし、節分は豆まきしたり、やっぱりお盆とかお彼岸になると先祖が大事と墓参りとかお寺も行く。12月には、ジングルベルが聞こえるとケーキなんか食べたりして、ちょっとキリスト教的な雰囲気味わうために教会も行ってみようかという曖昧な心情ですね。絶対的な信仰に裏づけされたものではない。

「この曖昧さが心地いい」と思う人も少なくありません。でも一つの文化として捉えた時には、生き方としていい社会じゃないかなって思ってしまう。私ははじめ仏教に興味をもって高野山で修行し、その後にスリランカにしばらくいましたので、仏教の中道の精神を体得しました。現地は結構戒律が厳しいですが、日本帰ってきて住んでいると、割と居心地いいんですね。

ですから、このスピリチュアリティと宗教とか文化というのは関連深いと考えると、もう少し深めていったときに超越的な存在としての神様、仏さまがあります。仏教では超越という言葉はあまり使わなくて、どちらかというと、統合という言葉をよく使うんですね。統合、超越というと、自分とは全く違った領域の世界がある。僕は神、キリスト教は門外漢ですけども、神様という存在はやはり自分を越えたものであるし、スピリチュアリティはそこからの「息」であったり「風」であったり「エネルギー」であると理解される人たちもいると思います。

そうすると、超越的な、自分を越えた意識、トランスパーソナル心理学という境地があります。日本では昔から宇宙だとか自然とよんだ世界、特に日本人は自然というものをとても大事にしてきましたね。山に帰るとか、土に帰るとか。あまり川へ帰るといふ表現はしません。これインドですと川へ帰るです。母なるガンジスの川に入って、そして最終的に天に登っていくというヒンズーの教えがありますね。だから、そういう自然に融合していく死生観があります。インドでは雄大な世界へ溶け込むという感覚というのがすごくフィットします。

そういったもののすべてがスピリチュアリティです。だからスピリチュアリティは個の内に俗するもの、個の中にある、私の中にもあるもの。さらに私を超え出たところとも繋がる意識。その関係性を私は仏教の縁という言葉で解釈したいんです。

それで今高山で私が行っているクリニックでは、先ほどまどか先生がまだ早いわよって言われていましたけれども、ベッドサイドで場面にあったような末期の方とも関わらせていただいているわけですね。

次の写真はお寺で妊婦さんたちのスピリチュアリティワークをやっています。亡くなってから坊さんがいつも出かけるもんですからまだ早いわよって言われるので、小さい時から坊さんに親しんでいけば違和感がないんじゃないかなと思って、それでお寺で妊婦さんや子育て中のお母さんのためのワークをやり始めたわけです。そうすると、小さいときから見ている坊さんだから、どこで会ってもいいわけです。まあそういう作戦なんですけれど。(笑)

逆にこれはドクターとか看護師さんにお寺に来ていただいて、臨終、ロールプレイを実習します。末期の亡くなる場面をイメージして、お互いにやり取りをするんですね。この写真はある病院の外科部長ですが、今日はあなた死ぬ役よってということで、やってもらいます。

これもみんな研修医で、ドクターなんです。高山日赤病院で研修している研

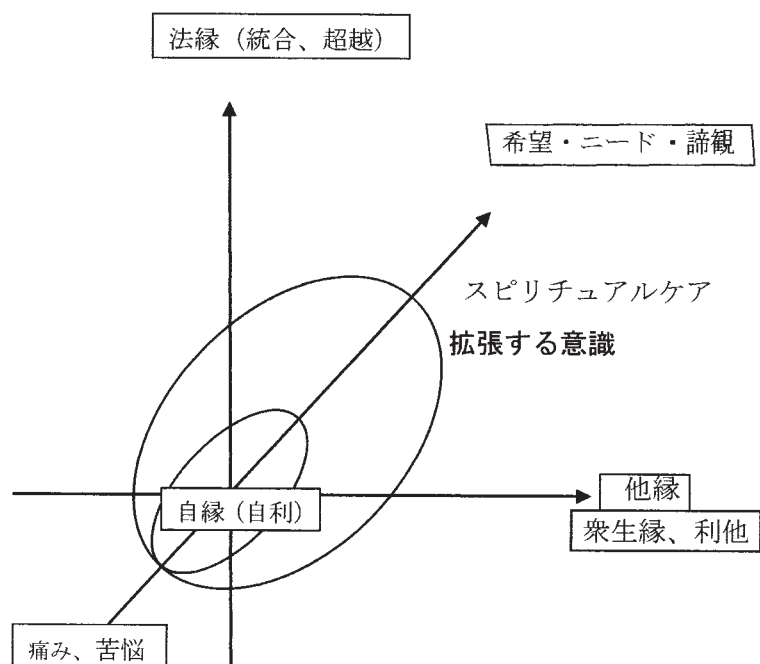
修医の人たちの1泊2日型のセミナーをうちのお寺でやっています。このワークでは瞑想を取り入れます。瞑想を取り入れるというのは、自分の中にあるスピリチュアリティを考えてみようよということです。普段は気づかない自分の内面意識に気付いてみようよというワークです。

ほとんどの研修医は瞑想をするのが初めてで、当初は何かぎこちないですが、段々やっていくとすごく上手にやられるようになるのです。彼ら自身が瞑想はこんなに心が楽になるのものと、実習後に驚いています。自分を心を観察し、やがてとらわれの自分を解放していくというのはすごく楽になることであることを体験していただいているわけです。

それで、私はこれまで何とか臨床現場で使えるスピリチュアルアセスメント、スピリチュアルケアアセスメントシートの必要性を感じて、今和歌山医科大学と協同研究でやっています。この6月に岡山であります「日本緩和医療学会」ではじめて発表します。(2007, 6, 22)

日本的なスピリチュアルケアサマリーアセスメントシートとサマリーシートというのを作りました。私は行動化しながらいっしょに作っていくというふうなので、すべてが完成品ではないですが、今複数の臨床現場で使用していただいて検証しています。その理論的枠組みが「縁生の構造的な理解」にあります。皆さんのところの資料にあるように3つの構造です。

それは自分の中で深める縁。自分の中にある縁と、それから他者とか社会、自分の外にある、あるいは自分との社会、自分の周りがある領域と。そして、先ほど言ったように自分を超越した垂直軸って言いますかね、そういう統合したものとの縁の3つです。これがみんな誰しも持っている縁ではないかと。生まれながらにして持っている縁です。ちょっと図的にすると理解しやすいかなと思いました。今言った一番目が自分の中で深められていく、自分がこの世に



スピリチュアルケア縁生構造図-1 大下大圓、2007

生まれたという縁。両親、お父さんお母さんあって、結婚しているとか離婚しているとか、いっしょに住んでいるとか住んでいないに関わらず、この世に生まれたということは、両親の二人の縁があってこの世に出てきたということです。

それで一番目というのは自分がこの世に存在する縁であります。ですから、それを自らの縁、あるいは自縁、あるいは自己縁と言います。仏教的には自分を高める、自分を生かすというようなことで自利と言います。

二番目は、他者との縁のことを他縁とか、あるいは利他。それを積極的に、どっちかという、健康的な領域で考えていくと利他と言うんですね。他者を生かす。自分を生かし他者を生かす。これ自利、利他と言います。

これも仏教で非常に大事にしている基本的な、宗派に拘らずすべての宗派で唱えている、自分を生かし他者を生かす。そして自分も生かされ他者からも生かされている。これ両方なんですね。実は相互依存なんです。もうベッタリ依存なんですよ。依存し合っているわけですね。

だから仏教の教えでは依存を決して悪くいいません。仏への絶対依存を持ちながら、その人が自分を見ていくか、極めていく修行を重ねて絶対自立、自覚の境地を獲得します。そのために何をやるかということ、法縁というダルマですね。ダルマというのは宇宙的な法則です。その関係性を常に念ずることによって自分とか他者という者との間の取り方、関係性を深めます。床の間という生活における間のとり方も文化です。

二人の間にある間。線を引くことではなくて、付かず離れず、あるときは少し距離を置きながら、あるときにはベッタリ囲い込む。悪い表現ばかりしてしまいますけれども、抱きしめる。そういう心境にありながら、あるときはスッと離れている。そして、最終的には離れて自由になる。離れていくというのは、私は「涅槃」とか「菩提」という仏教用語で表現しています。

したがって、私は仏教的な理解から、現場でのスピリチュアルケアの実践理論として、この「縁」という概念を使おうとしています。

いわゆる東西のいのち観を整理する意味で二元論と一元論という考え方があります。あまり分けて強調する必要もないかと思いますが、医療の現場というのは、エビデンス・ベース・メディシン（Evidence Based Medicine）という、実証性が重視されます。例えばこの薬は効くのか効かないのかという実験を繰り返して数値的にあらわしてその効果を実証してゆく考えです。そういう科学的な治験に基づいて臨床で採用されるわけです。つまり主体と客体を明確にわけて考えるやりかたですね。

それは二つに分けて考えるという二元論が根底にあります。その背景にあるのは、やはりそこにある客観性というものを非常に重視しますから、機械論的医学モデルという言葉を使って、現代医療の世界はあります。

しかし実際にスピリチュアルケアということを経験として入っていくと、自

分と患者さんとか、そういうものをあまり分けて考えられない状況が出てくるわけですね。あるいは、その人自身の中でも、自分の命とか自分の家族とか自分との超越的な領域というものも、その人自身も分けて考えられない状況になります。それを敢えて分けよう分けようとするとかえって混乱が起きてしまったりするケースがあります。もちろん、分けて考えやすい人は考えていただいても別に構わない、別にそれは強制することではないです。

むしろ、みんな繋がっているよという一元論的な発想をしてみると、なんとなくその人が落ち着いていくということが今までの臨床ケースの中に多くありました。

それを今から1300年程前に日本で仏教を基にやろうとした最初の人、聖徳太子だったのです。太子が維摩経というお経の中で発見するのは、「菩薩は衆生を病むゆえに、我もまた病み。衆生、病癒れば、我もまた癒ゆ」という言葉です。

そこに人と関わる本質を発見するわけです。「あなたが苦しむから私も苦しむ。あなたが治れば、あなたの心が癒されるならば、私の心も癒されていく」という平等性のいのち観であり共に苦しみを共有していくプロセスです。私とあなたは違うんだけど繋がっているという思考を発見するわけです。そして、仏教を基として和の思想を打ち立てました。

まどか先生が今「和学」をやっているんですけど、まさにこの対立する思考を排除するどころか、いっしょに和の中に入れて考えていこうじゃないかということですね。その本質に近づくことを学びとしてやることです。

この維摩経のもう一つの背景を考えると、あなたが苦しむから私も苦しむ、あなたの病気が治れば、私も治るとするのは、実は「私の心にすでに病たる心を持っているんだよ。人間は自分の中に病たる心がある、自分は完全じゃない」と、だから自分が完璧であってあなたは間違っているという見方じゃないんですね。私の中にも病たる心があるよ。それを自分が自覚したときにはじめて他者と平等に関係ができる。他者と関わっていくことができるといううなもう一つの意味合いがそこに含まれていると思いますね。

そういうことを考えますと、一元論とか二元論という言葉自体も実はこれからは超えていくのだと思います。

密教では「一即多、多即一」というような考え方を明示しています。一であって全部を含んでいる。統合的な思考が曼荼羅に表現されています。

ということで、もう一度西平直さんのほうへ移します。私の曖昧な考え方を論理的にお願いしたいですね。

【西平】：そうなんですよね。大圓さんの話はあるコスモロジーを作り出してくれるんですよね。だから入って行ってしまおう。それでいけば、大圓さんといるときの僕は、「分ける」ほうの役になるんです。

でも、例えば自然科学の人といると、ないしは、例えば心理学の人といると僕はコスモロジーの人なんです。でも、大圓さんといるときの僕は区別する役廻り。ということは、実は大圓さんの中にも当然区別する余地があるということですよ。僕の中にもある。

その両面が相互に出てくる。異なる面が出ていくというか、だから理想的には八の字図形といいますか、レミニスカートなんですよ。

ということは気功の話ですよ。こちらにいったときには、もうあちらにいく流れができていなかったら気功の流れはできないですよ。それといっしょの意味なんです。

【大下】：本当ですね。

【西平】：じゃあ、ほっとしてもう少しだけ。

違うんだけども繋がっているという、あの言葉です。僕が二重の見とかというのはそれなんです。違ってはいるんだけども繋がっている。だから矛盾なんです。どうにも矛盾。

それを、即という言葉で。僕の理解ではダイナミズムです。

一なるものと多なるもの、この話です。一なるもの(③)と、いっばいに区切られた②とが、一は即多だと。多即一だと。

これは融合してしまっていて終わりの話ではなくて、やはり異なるものの、僕は反転という言葉を使おうと思っています。反転し合うと。

それを、大圓さんが先ほどから、臨床のトレーニング、あれは図で見れば④のものの見方を体で確認している作業に思えてならないんですよ。だから瞑想のプログラムが組み込まれますよね。瞑想でなくてもいいんですよ。さっき大圓さんの言い方だと、ご自分の中に③があることに気付く作業だとおっしゃいましたよね。

少なくとも、②から④へではないんですよ。おそらくそれは僕が語ることでなくて、この人間関係センターの先生方が一番お語りになられることだと思いますけれども、②の知をもってそのまま移って行って二重になるのではなくて、やっぱり一回消す。少なくとも小さくする。

今あるものが消えると、おのずから現れてくるという、あの感じなんです。だから、ブラインドウォークに似ています。僕らはいつも視覚に支配されて生きている。そこを取り去るだけで、例えば足の裏の感覚がよみがえってきますよね。花のにおいが感じられる。学生たちといっしょにやると、外に出たときお日様の光で飛ばされるようになるという。

じゃあ、僕らはいつものときに、足の裏に感覚がないかと言えば、ありますよね。光を受ける感覚ありますよね。あるけれども、あまりにも視覚が強いから隠されちゃっているわけです。

だから、厚みが出るということなんです。今ここ、表面、ホワイトボードでやっているからうまく言えませんが、言ってみれば大圓さんが一生懸命やろう

と思っているのは、②の奥の厚みを見ようとしているということですよね。

この厚みができたうえで、④をねらうと。実はそれこそ大圓さんにも前話したかもしれないですけども、患者さんの気持ちを理解する、あなたの苦しみを私のものにするという、そこだけが強調されることに、僕は心配しているところがあるんです。

というのは、それをやっていると潰れてしまうと思います。ないしは、私とあなたは違うという側面を大事にせず、繋がっているだけが強調されてしまうと、さっきの「違っていても繋がっている」にならないですよ。違っていても繋がっているほうが消えちゃう。そうしたら、繋がっている、つまりあなたの痛みが私の痛みだ。この痛みは繋がっていると。

それでも「やっぱり違う」は、②に戻るのではなくて、やはり④なんだと思います。たぶん大圓さんのトレーニングはその二重をやるようとしている。だから、違うけども繋がっているという。一体感を求めるけれど、でも、やっぱり私は私、あなたはあなた。だけど繋がっている。

とすれば、そこは即といえば即なんですよ。繋がっている、即、違っている。例えば、僕は即では十分理解できないから反転だと思っています。何度も戻ることだと思っています。それこそ、レミニスカートの動き。

本当は大圓さんが語るべきことなんだろうけども、今まで僕は③をあたかもなんか、これとか言ってしまうんですけども、東洋の思想が語ろうとしたのはある意味で③は何もないといったらいいですか。僕は学生にはいつもこれを持ってきているんですけども。

[この箇所を文字に起こすことは不可能である。「区切りのない」③は、それまで、白い紙によって示されてきたが、ここで透明なパラフィン紙が持ちだされる。白い紙はまだ何らか見えちゃう。それに対して、東洋の思想でいう③は何もない（無）であることを示すために「透明」のメタファーに託して語ろうとした。]

区切りが全くなくなってしまったなら、もう理論もなくなってしまいうわけです。それをもって東洋の人は例えば空と呼ぶんです。無と呼ぶんです。だれど、これを無と呼ぶのは、今僕らが一生懸命上から見てこういうふうには話しているけれども、本当に語りたいのは、それこそ、先ほどから語られている、命が私を通して表れてくるというこの感覚。そのためには透明にならなくちゃ。

そうすると、これは単に東洋の思想というだけではなくて、例えばキリスト教的な神の理解も、②で考えられた神の概念と、透明な体験の中で私を通して表れてくる神概念では、微妙に違うと思います。

その辺はちょっとまた別の分野の話になってくると思いますけれども、またここに戻せば、繋がっているだとか空だとかという言い方は、今は便宜的にします、仕方がないから。するけれども、実はこれは何者かが、それを神という

なら神です。大いなるいのちというなら大いなるいのちが現れてくるというこの感覚が大切です。

そうすると④が何かと言えば、もはや私が生きているのではない、いのちが私を通して生きているという感覚と、でも私が生きている、この私。一度しかない人生を生きているこの実存的な私。その両方の重ね合いの感覚。

だから、僕はスピリチュアリティという言葉が、あるときには実存的なニュアンスで、でもあるときには個を越えた、もはやもう繋がりの大いなるいのちと、その二重性を持つと思います。そのダイナミズムをスピリチュアリティという言葉は捉えていて、大圓さんはそれを臨床の場でトレーニングになさっているように僕には思われます。

たぶんまどか先生は、それを和という言葉でお考えになっているんだろうと思います。

まどかさんに振るべきかなあ。

【大下】：そうですね。実は私と西平直さんの共通の友人に高山にキリスト教の牧師さんがいます。大郷博さんという、アブラムの里という実践教育施設をやっています。そこの関係で私たちのご縁ができたのです。私はイギリスのホスピスを見たくて、15年くらい前にその牧師さんといっしょにイギリスを回ったんです。

そのときに、私たちは教会の裏部屋に泊まりまして、ミサにも参加して、特にダイアナ妃が結婚したところの聖歌隊のあるミサに参加したときは感動的でした。その牧師さんと一緒に一番奥のほうに入れていただいて、聖歌を聴いたのです。そのときに教会音楽に癒されて、僕はキリスト教は二元論、仏教は一元論と簡単にいうけど、そうではない感覚です。そこには二つを分けるという、私の中でそういうニュアンスは出てこなかった。神という存在とか、宇宙という存在とか、それはここで歌っている人たちの声とか、なんかそれが全部一つの世界の中に共存しているような、そういう不思議な感覚を得て、それで私は仏教にもある声明音楽を活用したいと思うようになったのです。

私にとって、音楽というものが両教の垣根を越えて繋げてくれたんですね。そして音楽だけじゃなくて、私はキリスト教の教会の中でそういう癒された思いを体験してから、すごくキリスト教が好きになりました。教義ではなく感覚だけですが。それで最近わりとキリスト教関係のところで呼んでいただいて、今度上智大学とか東京キリスト教学園のほうへも呼ばれて行かせていただくんです。

私の中で違和感を持っていない。つまり、最終的には単一の宗教というものすらも超えていく一つのスピリチュアリティがあると思っています。理想論かもしれませんが、宗教という枠とか、民族というものを超えていったときに本当のネットワークができるスピリチュアリティが出現していけばいいなあと個人的には思っているのです。

そろそろまどか先生のほうへ行きましょかね。

【進行】：初めてのジョイントコンサートのお役で、大変戸惑わせたまどかでございます。宗教という文明の歴史とサイエンス、科学という文明の歴史があるとしたら、それは西洋の歴史における言葉だったのではないかと。

そして、私たち大学人として、大学を引き受けている身としてはユニバーシティという、このユニバース、この宇宙論は、キリスト教の西洋の歴史を持っていた一つの大学の歴史の中に日本人はまさにパーソナリティの成長のモデルを与えられながら、教育、あるいは教育政策、あるいは教育の近代化の中にいたのではないかという、大きな大学の仮説ですね。そういう大きな、大学って何だろうということは必ず大学人が、あるいは大学生がぶつかる問題です。

そして、教育に携わる教師たちはほとんどの人は大学を出て教師になります。ですから、今は教師であれ、看護師であれ、医師であれ、あるいは何々師であれ、その“師”という資格を与えられながら、この人間って何なんだろうか、あるいは宇宙って何なんだろうか、あるいは私って何なんだろうか、あなたって何なんだろうかということを、あるいは突き詰めて今日お話になりましたスピリチュアリティって何なんだろう、あるいはスピリチュアルになってどう答えていかなければいけないのだろうかという立場にも立たされていらっしゃる多くの大学人がいるのではないかと思って、こういう企画を立てさせていただいたのではないかと、あるいは、いっしょに考えていただけたらありがたいというふうに思っておりました。

今、こういういろいろなチャレンジの中でいろいろインテグレーション、統合とか、統合医療とか、あるいは先生方の今のパーソナリティというのをどう捉え直していくか、スピリチュアリティというのをどこに位置付けながら問題提起していったらいいんだろうかというような、いろいろな皆さんに対する問題提起がなされていたし、またそのプロセスの中に入れていただけたのではないかなと思います。

せっかくお時間をこういうかたちでいただけてますので、フロアからの質問、そしてそれにまつわっているいろいろ補足的にお話しただけたらと思います。

【フロアA】：今日は本当にどうもありがとうございました。

今患者さんの写真が出てきましたが、何を語ってみえるのかなというのをすごく興味、関心を持ったんです。

つまり、スピリチュアルケアの、いわゆる実践でっていうのですか、エピソードを少し話していただけるとイメージが伝わってくるかなと思ったんですけれども。何かあれば、その臨床の場でこんなことがありました、こんなことを話したら、こんな感じで帰ってきましたとか、そういった具体的な話があれば、話していただけたらありがたいのですけれども。

【大下】：ええ、いっぱいあります。

というよりも、それはすべてこちらが話すというよりも、目の前の患者さん

が持っている内面的な世界ですので、それを私たちが聞かせていただきながら、いっしょにやり取りをしていくんです。

私がスピリチュアルケアを一番最初に必要だと感じさせていただいた人は、私に対して「死にたい」というメッセージを出されたんですね。その死にたいというメッセージが出てきたときに、私が何も答えられなかったのです。

それは20年前の話なんですけど、自分が何かその人に対して回答を出さなければとか、助けなければとか、救ってあげなければとかって、そういう気負いがいっぱいあったんだろうと思います。回答をだせない私が居ることに大きなショックというか、衝撃で、それは何か私の中に操作しようとしていた思いが働いていたんだと思います。

そうではなくて、その人をまずは丸ごと受け止めるという度量が欠けていた。そこからなぜその人が死にたいというメッセージを出すのかということはいっしょに考えていくプロセス。先ほど、まず二人が理解できないところ、それを飛び越えていくのではなくて、そのプロセスのところにきわめて重要なスピリチュアルワークがあるんだろうというふうに思いました。それで、そういう本音を語り合う関係性を構築することを大切にするようになりました。

あとは死生観ですね。一番に出てくるのはその人の死生観というのは、あの世に対する課題であるとか、あるいは死後の世界であるとか、あるいはその人の生きている意味、私の人生の意味はあったんだろうとか、その意味、問いかけですね。自分の人生に対する問いかけ、そういったものもたくさんあります。

だから、本当にその人その人にとってみんな違うので、一言では言えないことはいっぱいあります。その辺は、講談社の「いいかげんに生きる」という本の中に書きましたので、どうぞ読んでいただければと思います。ついでにここ宣伝の場でいいですか。6月20日に講談社から二冊目の新書が出ます。これは最近の関わりとして、リストカットの方とか、社会に適応しにくい人たちと関わってきたことを含めて、孤立している若者のことをかなり書かせていただいています。本のタイトルは「人の力を借りていいんだよ」という本です。あるときは人の力を借りて自分を取り戻し、元気になって、今度は他人に返す。そういうキャッチフレーズですのでよかったら読んでください。

【フロアB】：職業は看護師をしております。西平先生にご質問したいのですが。

先ほどのところで、師匠と言われる教育のところなんですけど、私自身、本物を見極めるとか、やはり育てられる人が育てられるという、そういう人に付いていくと本物になれるというふうに、私自身の看護師の師匠に言われて私自身が育てられたという体験をしたんですけど、ただ本質とか本物に出会うというのがまだいまひとつ自分の中に納得して入ってきていなくて、先ほど先生がおっしゃった中に何かヒントがあるなというふうに思ったんですけど、もう少し詳しく

くお願いをしたいのですが。

【西平】：まさにそこが問題なんです。

それこそ本物を見分ける目をどれだけ持てるかですよね。と同時に、本物という決まった完成像が向こうにある、というものでもないだろうという予感します。

先ほどの大圓さんの話と繋ぐかたちで言えば、例えば間を取るというのがありましたよね。間というのをすごく近づいたり離れたりという、この距離の取り方といいますか、間合いの取り方といいますか、たぶんそこが一つだろうと思います。

本物の師匠、括弧付きですけれども、本物の師匠の持っているあるセンスと言ったらいいですか。だから、その時、その都度、対機説法みたいなものですね。

もう一つ、どうやら逆説的な語りをするというのがポイントであるように感じられます。その逆説というのはある場合にはユーモアとして出る、ある場合にはイロニーというんですか、アイロニカルな、皮肉的というか。皮肉って傷つける皮肉ではなくて、なんというか、それこそ自分で自分を笑っちゃう感覚に近いですね。

それは自分から距離を取ることができないとできないですよね。だから、どうやら僕が観察すると、本物の人であればあるほどそのときに必要なユーモアが出てくる。と同時に、フッと厳しい、厳しいというか気付かせる、ハッと水を掛けるようなアイロニカルな言葉が来るように感じられます。答えになったのかどうか。

【フロアB】：ありがとうございます。もう一つよろしいでしょうか。大下先生のほうに。私、透析患者様の看護をしているんですが、いろんな障害があって、そして、ご自宅に帰れなくて、ずっと一生涯透析をしなくてはいけなくて。それで、心身ともに衰えてきていて、だけどそこに行くとお癒されるんです、私自身が。どうしてもその患者さんの看護をしたくなってしまう。その人のところに行ったほうが私自身がすごく成長できるといいますか。

うわあうわあという人ではなく、本当に苦悩の中にいるはずなのに、それを取って私たちのほうがユーモアたっぷりに表現していただいて。そうすると、なんか起こして背中を拭きたくなる。拭いてくれと言っていないのに、余分にかやりたくなるという人の体験をしたんですが。その辺がスピリチュアルケアというのとその関係性を教えていただきたいのですが。

【大下】：それはあなたとご縁があるんだと思いますよ。それに尽きると思います。そういうスピリチュアリティの関係性があると思ってください。

【フロアC】：貴重なご講演ありがとうございました。大変参考になりました。

私、団体職員なんですけれども、ですからその医療の現場とかには従事してないんですが。今日個人的に関心を持ったのは、まず西平先生のお話では、私

は茶道と華道を20年ぐらい続けていますので、本当に日本のこの型が教えてくれる、またその守破離という言葉が道の道ではよく語られるんですけども、そういったことを非常に分かり易く解説していただいて、経験している部分とまだこれからしなければいけないと未到達の部分を含めて大変参考になりました。ありがとうございます。

あと大圓先生のお話で、特にこのレジュメの3枚目のスピリチュアルケアの目的というか、醍醐味のところで、真ん中辺りなんですけれども。その目標とするところは、社会の安寧と国際平和に寄与するという立場で大変同感できると思うんですね。スピリチュアルケアって医療の現場だけではなくて、やはり、私は企業の研修とかはしているんですけども、そういう精神でもって、例えばグローバル化などを展開していただきたいなというふうに常に携わっているわけです。

そういう視点からいうと、今日のお話は私は日本人としては大変納得性のあるもので、二人のお話から巴の絵なども自分の中では出てきたんですけども、この表と裏のですね。

ただこの概念をやはり異文化の方、ベースが違う方ですね。先ほどの日本の原風景を持っているから、やはり浮かべれるような、一即多みたいところは共感できると思うんですけども、概念がないところにどうやって伝えていくかという課題が直面している部分もあるんですね。

それで、大圓先生、先ほどキリスト教の方が共感を、トランス、一種教会音楽のときにされたということで、例えば神と人間という立場であれば、ある意味宗教観というものを持っていらっしゃる方であればできるかもしれないんですけども、本当に一般的なそういう感覚、いわゆる無宗教とっていいんでしょうか、本当に現代に生きるある意味その資本主義的とか、マネジメントの二元の世界で生きていらっしゃる方に、どのようにこういう考え方を働きかけていくかというのは、もしされた経験があれば教えていただきたいし、そういうことをアプローチされようとしているならばどのような切り口から入ることをお考えになっているかを伺いたいと思います。どちらでも結構ですけども。

【大下】：やはり体感していくということを僕は大事かなと思っているので、特に自然を使うこととか。このあいだも名古屋である企業の方を対象にワークショップを1日やったんです。そこでも瞑想ワークを取り入れ、いかに他者のエネルギーを感じていくような、そういうようなワークをするかで、ずいぶん感覚的に捉えられていきます。

だから日本人だからかもしれないですね。私でも、まだあなたが今指摘されたような異文化の方にどういうふうに理解していただくかということは、まだ十分な経験ないので今後の研究にしたいですね。ただ、去年インドで11月にボランティアのIAVE（ボランティア活動推進国際協議会）世界会議というのがあ

りまして、インドでやるんだからあなた行けということで、僕が行ってとにかく30分で英語でスピーチをやらせていただいたんです。

そのときにそのスピリチュアリティのネットワークを作ろうよと呼びかけたら結構賛同していただけて、その内容的にもやはりなんというのか、もう国境や民族とか宗教はあまり関係ないのかなと思った皮膚感覚もあります。私の思い込みもありますが。

だから、その人のベースがなんであれ、互いを分かろうとする気持ちが繋がる要素を引き出してくれると思います。その辺は、まだ私もこれからの宿題にします。

逆に今度は異文化の方々にもこんな、例えば縁の話をしたときにどういうふうに理解されますかと話を聞いてみたほうがいいのかもしいんですね。でも今日も、異文化の方がもしかしたらいらっしゃったら発言していただければ嬉しいですね。

【西平】：いいですか。一言だけですけれども。

例えば、「キリスト教も仏教も同じ」となると危険ですよ。大圓さんがおっしゃってくださるのは、やはり、キリスト教は仏教と違う。違うんだけど繋がりがあるというその辺りの感覚です。

僕のイメージは地下水なんです。地下水が流れているのを、例えば仏教という井戸から汲み上げるんです。キリスト教という井戸から汲み上げるんです。「だから同じだ」にはしないほうがよくて、やっぱり汲み上げればその味はちょっとずつ違う。歴史が違う。違うんだけど根っこは繋がっている。繋がっているこの地下水を直接汲むことは僕らにはできない、許されていない。

だから、仏教の、例えば、日本人の味の付いたスピリチュアリティを語るしかないと思います。そうすると、例えばインドの方と微妙に違う、まさにその違いを確かめながら、それぞれが中に入ればいいんだと思います。そうしたら、どこかで繋がっていることを体が感じる。それは間違いないですよ。

【大下】：やったあ。さすが！西平先生だ。わかり易いととてもいい回答ですね。

【フロアD】：富士夢祭りというものを始めているものです。

なんか提案みたいな感じなんですけれども。自分はその地下水みたいなのがすべてエナジーなのではないかなと思ってまして、自分はその違いという部分を、富士夢祭りというのはたまたま自分は、ハンカチに夢を書いたものを集めているんですね。それはすべての宗教・国境を越えて集めてきて、その違いを繋げるということを赤い糸で繋げています。それを一つの輪にしています。ドリームリングというのを。

それを富士山の頂上に掲げて、それをハッピーニュースに流すということをやって、それを今年は7箇所世界的にもやろうと今思っているんですけれども。

それで、その当面のところの提案としまして、そのフレーズというもので

自分を考えるんですけれども、その第1回目は第1フレーズ・第2フレーズ・第3フレーズという感じで、位相という形でどんどん形が変わっていく、氷が水になってとかいうふうに。

それでなんかそれを、空とか何もないというよりはエネルギーで考えたほうがいいのではないかなと思って。というのは科学的にも今はもう、その宇宙的にいうとダークマターとかも全部出されてきてエネルギーであるということとか、見えないエネルギーがあるとかいう、質量あるけど見えないとかそういうものがあると考えたほうがいい、そちらをエネルギーというふうに考えたら、なんか自分はなんかいろいろ感じるものがあっていいのではないかなと思って、提案、提案ですけれども。すみません、失礼なんですけれども。

どうかなと思って、お聞きしたかったんです。

【フロアE】：今日はどうも、とても深い話ありがとうございました。

違うけれど繋がっているというその微妙なところですね。その同じだけれど同じではないというようなところ、とてもそのところを今後深く追求したいと思いますけれども。

結局、その自我を育て自我を離れるという、つまり私とは何かという問題なんですけど、その先生自体がその私ということをどのようにその体験的に捉えているのか教えていただきたいと思います。

そして一つは要望なんですけれど、そのまどか先生のその言葉と命とこの会ということですから、その言葉とその命についての私という側面から私というそのご見解を聞かせていただきたいと思います。

【大下】：僕の質問ではないなと思って安心してたんですけど。僕は好きなのはいろは歌なんです。最後にも載っています。

それで何が好きかという、楽しみとなすというのがとてもいいんですよね。仏教って生老病死の四苦を語り、苦しいことばかり、なんかこうマイナーな、非常になんか暗いというイメージを持っておりましたけれども、これを見て私は救われたんですね。

これは仏教のスピリチュアルな部分だと思うし、ウェルビーイング (well being) というよく生きるという部分で先ほどの超えていく意識のときの心境を語っているのかなと思います。だからすべてが「為楽」という、静寂、寂滅をもって楽と為すという、さっきの透明のところの奥にあるものではないかなと思うんですけれどもね。

ということが結論です。

【進行】：今、西平先生に一つご質問があったのではないですか。「私」ということの、言葉についてお願いします。

【西平】：僕が悪いところとして、大圓さんはきた質問をうまーくこう。僕は真っ向から受けて立とうじゃんかってなるところがあるんですね。だけど「私」についての体験的なといわれると…。

【フロアE】：先ほどすばらしいことをおっしゃってたんですね。私が生きているのではない、内なる神が湧き出ているのだというようなことおっしゃってましたから、そのあたりのところをお聞きしたいなぁという気がして。

【西平】：うーん、たとえば聖書、福音、ガラティア書のあたり、「もはや我來るにあらず、キリストの内において來るなり」ですよね。だから、もはや私が生きているんじゃなくてキリストが私のうちにあってキリストが今生きている。というあの感覚だろうし、たぶん、仏教の世界ではそれがどういう言い方になるんですか、(空海さん)だと…

【大下】：急に振らないで下さい。私なりに解説しますと、直さんは、生まれながらにしてそういうスピリチュアリティを持った人なんです。それが客観的な私の理解。ですから、体験というよりももうこの人の生き様そのものが、スピリチュアリティな魅力をもった人なのです。

だから、こう具体的に何かこう修行したとかいうことではなく、私はもう本当にこの人の持っている素晴らしさだなど、私の尊敬するところはそういうことです。

【西平】：で、もしそれを受けるとすれば、スピリチュアルであるということは、矛盾を抱え込むということになるという。そう言い換えてもらえば、僕はハイ、矛盾を抱え続けてます。その意味では。

【フロアE】：それはその、透明なところと青い部分がつながっているというようなことだと考えてよろしいですか。

【西平】：うーん、はい、いいです。

【進行】：はい、やはり次のセッションを用意しないといけないようになってきたように思えます。最後に、お一言ずつといいますか、先生方、一言ずつお願いいたします。

【西平】：もうたくさん話したんです。だからもうあんまり無いです。むしろ、こここの人間関係センターの先生方が、こんな話をどう聞いてくださるか。っていうよりも、むしろだから、これを実践してらっしゃるんだっていうのが僕の理解です。だから、たとえばファシリテーションは、こここのためのトレーニングに思えてならないです。だから、本当は津村先生にここから1時間、とか。

【進行】：ありがとうございます。

【大下】：答えにならない答えを出すのが私の特技でございましたので、私は、最後に皆さんに、メッセージとしてこのいろは歌を歌って、今日の私の最後の言葉にしたいと思います。

それで、これは越天楽(えてんらく)という音曲を使います。越天楽も昔から日本で使われてきた曲相ですが、それを使用してアカペラで歌ってみたいと思いますので、目を閉じていただいて、自分なりにどこへ心が行っても結構でございますから、いろいろ思いをはせながらちょっと聞いていただければと思います。

「いろ（色）はにほ（匂）へどち（散）りぬるを。わ（我）がよ（世）たれ
（誰）ぞつね（常）ならむ。うゐ（有為）のおくやま（奥山）けふ（今日）こ
（越）えて。あさ（浅）きゆめ（夢）み（見）じゑひ（酔）もせず」

はい、ありがとうございました。

【進行】：ありがとうございました。

では、これにて「人間関係研究センター春の講演会 教育におけるスピリチュ
アリティ、自我を育てる・自我から離れる」をおひらきにさせていただきます。

西平先生、大下大圓先生、どうもありがとうございました。皆様、どうもあ
りがありがとうございました。